

NewsLetter



自治医科大学地域医療オープン・ラボ

Vol.158, May, 2020

地域医療オープン・ラボ NEWS LETTER CRST メンバーリレーエッセイ No. 9

“「わかりません。」って、堂々と言えますか？

環境予防医学講座 市原佐保子

リレーエッセイ9人目として、分子病態治療研究センター 炎症・免疫研究部の高橋将文先生からバトンを受け取りました環境予防医学講座の市原佐保子です。所属する教室が、高橋先生の講座の隣に位置し、また、循環器専門医であるという共通点から、バトンが渡されたのだと思います。

自治医科大学には、3年前に赴任しました。生まれた時から住んでいた自宅の門を出ると右手にその建物が見えるほど近くにある名古屋大学を卒業し、長く東海地方に住んでいますと、栃木県の「栃」を書くのに戸惑い、引っ越した現在の自宅がある埼玉県を「埼玉県」と書いていたのを学生に指摘され、その後、夫も「埼玉県」と書いているのを見つけ、笑いました。大学の近くで「しもつけ」と書いてある看板等をよく目にしますが、実は、「下野」のことであったのが半年ほど過ぎた頃でした。



現在は、研究を主体とする生活をしていますが、大学卒業後十数年は市中病院および大学病院で、臨床業務に従事していました。生命現象には、まだ解明されていないことがたくさんあります。研修医のころは、患者さんの質問の答えがわからないとき、「聞いておきます。」とか、「調べておきます。」と答える初々しさがありました。しかし、医師としての経験を重ねてくると、知識に加え、話術と度胸・凶々しさを身に着け、本当は何だかはっきりしないな～、よくわからないな～と知っていても、知っていることをつなぎ合わせ、相手（患者）を納得させていました。

その後、大学院生として研究を経験し、米国に留学するチャンスがありました。大学院では循環器内科教室に所属し、ヒトサンプルを用いた臨床研究を実施しており、実験としては、血液からDNAを抽出し、PCRをすることしかやったことがない状態で、米国では大学医学部の生化学教室に入りました。米国の研究室では、ボスを中心にいろいろな国からの留学生がポスドクとして研究に従事していました。さらに、多くの研究室に優秀な技術職員（テクニシャン）が居て、彼ら彼女らは専門的な技術を有し、長く仕事を続けているため、給料や待遇も高く、また、研究に極めて重要な貢献をしていました。私自身、実験に関しては何もできない状態だったので、その技術を身に着けようと動物実験を専門にやっているテクニシャンに長くくっ付いていました。米国では、研究者がテクニシャンに実験を依頼する形を取っているので、私の行動はテクニシャンにとっては、奇異だったようですが、その時得た技術や取り組み方は、今の研究活動に活かしています。

1週間に1回ラボミーティングがあり、進捗状況をボスや同僚と議論する時間がありました。ボスは基礎研究者であり、現象を明らかにし、そのメカニズムを解析する論理の構築をどのようにすべきか、たいへん厳密な考え方を持っていました。ボスの質問の答えを用意するために、多くの文献に目を通し、深く

考える素養が身につきました。ある日のラボミーティングで、ボスの質問に対し、その答えがわからなかったので、「I don't know.」と答えました。すると、「それは、You don't know. なのか、もしくは、Nobody knows. なのか、どちらだ（日本語訳）。」と聞いてきました。日本語にすれば、どちらも、「わかりません。」ですが、その英語で言われた両者の意味することは、全く違います。衝撃でした。

留学から戻り、医学博士を取得後、しばらく市中病院で働きました。インターベンション等の技術はさすがに鈍っていましたが、不思議なことに、臨床医としての力は、数段にアップしていると感じました。具体的に説明することは難しいですが、研究をするという経験で、論理的思考力が鍛えられ、瞬時に多角的に物事を考えられるようになっていたからでしょうか。その後は、後輩医師に、優れた臨床医になるためにも、一度、研究に携わってみるのも良いよ、と声をかけるようにしています。

「わかりません。」と堂々と言えるのは、まだ、解明されていないことを認識している。または、そのものは知らないけど、それ以外のことは理解している場合です。今は、関連する分野で、I don't know. と出来るだけ言わなくても良いように知識を深め、Nobody knows. である事柄を一つでも無くせるよう予防医療に貢献するための研究に取り組んでいます。

(2016 年から不定期に CRST*メンバーによるリレーエッセイを NewsLetter としてお届けしています。次回の執筆者は、自治医科大学 遺伝子治療研究部 水上浩明先生の予定です。)

*CRST は、本学卒業医師の地域医療に根差した研究や論文を支援するために、2010 年 7 月に発足した「地域医療研究支援チーム」です。現在、199名の有志教員にご参加いただき、各専門分野における研究テーマのブラッシュアップに加え、一般的な論文作成支援にご協力いただいております。2013 年 4 月に発足した「臨床研究支援センター」活動の一翼を担う組織として位置付けられています。CRST に参加し、研究支援活動を行っていただける方をひろく募集いたします。チームの活動は、主にメーリングリスト上での情報共有とディスカッションであり、会合等による時間制約はありません。チームメンバーの専門領域についてのご意見とご指導をお願いすることになります。参加登録や本企画へのご意見は、地域医療オープン・ラボ（内線 2338、openlabo@jichi.ac.jp）へご連絡下さい。

CRSTホームページ <http://www.jichi.ac.jp/dscm/CRST.html>

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>